

わたくしは、きわめて漫然とではあったが、今日において絶対的であるかのように思われている美と醜の素描をつづけました。

国内的に男性美があり、婦人美があるように、国際的にもある。そして、これらすべての男性美および婦人美を統制しているものは、いうまでもなくヨーロッパである。白人の、かの巨大な体軀、傲慢な鼻、そして白色の皮膚の前には、黒色、銅色、黄色のやからは、一も二もなく自らの醜であることを恥じている。

しかし、黒色であることが、銅色であることが、はたまた黄色であることが何ゆえ醜であらうか。絶対的に何らの理由もそこにはない。そしてただ感じられることは、今日の美と称するものは、今日の強権制度の生んだタイプである。然ればその強権制度、したがっ

てその生んだ美のタイプにおいても、まさしく絶頂にある白色のやからを、美と感ずる所以である。

これに打ち克つためには、ただあらゆる意味において「自主的」であること、けれど今日のような強権的態度を固守する限りにおいては、とうていそれは望まれない。根底からの自主、自治、すなわち自給自足の経済制ないし生活の態度によってのみ、彼等のタイプから少しも圧迫を蒙らないばかりでなく、それと抗争しうる、新たな權威あるタイプをきずき上げることが出来るであらう。

しかしながら、これは将来のことで、現在はどうか。

いまや世界の全婦人は、あらゆる理由とそして必然とによって、美へノ 美へノ 逆巻き、渦巻き、流れ行きつつあります。そのためには、すべての亭主どもを踏みにじり、子供を死なせ、そして彼女自身もまたその生命を惜しまないであります。

この素晴らしい断末魔的な乱舞、この大風潮の先端に立つものが、ヨーロッパ強権文明の最後のものであるアメリカであり、その放胆な、気の違った女性たちであることはいうまでもないことです。

そしてすべての強権国は、それが強権国である限りに於いて共通しているところの、多くの宿命によって、自らの国の女性たちを、アメリカ女性へ合流せしめつつあるのです。全く驚嘆に値する現象であります。しかも気の違った女性たちは断じて、一顧をす

ら与えないでしょう。そしてそれは、ある意味において、きわめて当然なことなのです。

おしゃべり 「わたし、お宅の旦那様の妙なうわさを聞いてよ」

細君 「話して頂戴……、わたし新しい着物をこしらえたい時ですから」

といったような調子なのです。夫の品行などを誰がいまどき問題にするのですか。むしろそれこそ、一つの着物をせしめるための最もよい機会なのです。

始めに人が女性を歪めたものに作った。そしてすべてのそうした歪めた、不自然なものには病気がある。病気は、それをそのままおさえつけておくと腐敗して、腐敗したところから辛辣な毒素が発生する。もはや丁度その時がきたのです。全世界の女性は、その驚嘆すべき毒的乱舞によって、宇宙の意志を遂行する。

六

家事におわれてくすぶる女性がよいか？ それともお化粧の上手な女性がよいか？

妻としてはくすぶる女がいい。が、恋人としては美しい女がいい。こういう風に二つの型にわけて考えられます。くすぶりもせず、家事も上手に、という賢夫人型の中にはあるけれど、こういう型の女性は理想的にはいいようでも、実際的にはそれほどよくもなく、歓迎もされない。

ともあれ、大体において二つの型が始まった。もちろん婦人たちは、そのいずれである

ことをも嫌ったが、いやななかにも、とりわけいやなことは、くすぶることであった。お誰がそれを好もう。わたしどもは、かの「バカンツ」という物語に、あやしく胸のふるえるのを感じます。ギリシャ的制度の代表者なるベンジウスが、彼の生みの母アゲーウを先頭とする狂婦人等に襲われて、寸断されたことはむしろ故あることではないか。

かくて、名誉という空手形が与えられねばならなかった。妻に対してそれが与えられねばならなかった。何となれば、妻こそは「魂と生命とをもつ、あらゆるすべての生物の中で最も悲惨なものである」

空手形は与えられた。妻以外の女ども、かのいたずらに町をうろつき、瞳のはしで男どもを見上げたりするような、汚らしい習慣の持ち主どもこそは人生における屑であって、その名前を娼婦、妖婦、毒婦などといわれる所以であるとした。

かくて可憐な女性たちのすべてが名誉の中へか、不名誉の中へか、ともあれそうしたものの中へもぐり込むこととなったのであります。

自分のあいだそれがつづき、社会はかれの秩序を保った。妻は社会を背景に他の女を嘲けり憎んだ。他の女の存在は、社会にとって最も忌むべきものだ、妻の中の賢婦人たちはいった。今日でも、エセ社会主義を奉じている婦人たちの中に、こうした賢婦人型が多く、彼女たちがヒステリックな声で、モップの娘とか、恋愛過剰型の女とか、罵っているのをきくことがある。

だがしかし、他の女たち、娼婦、妖婦、モップの娘たちはきわめて不名誉ではあった。不名誉ではあったが、男とその愛とを占有し、その世界を楽しみの多いものとした。

もし美しい婦人がいなかったら

この世はいかになつていたのであらう

と、ドイツの詩人ヨハネス・ハブラウプは歌った。

西施醇舞嬌として力無く

笑つて倚る東そう白玉状

と、支那の李白は、美人西施を讚美する。一世の妖婦といわれた楊貴妃が、馬鬼といふところで殺されると、一世の詩聖白楽天が、

六軍不発無奈何

宛転蛾眉馬前死

と悼んだのは、有名な話である。

詩というものは民衆の感情を表現する。妖婦や毒婦などという名は、全く汚らしくてきわめて不名誉だ。だけれども、それは不名誉ではあれ、かまどの保護者としての妻よりはよいのだ。

妻は社会的にはいささか慰められる。けれどそこには肝心の夫の愛はない。現在あるように見えても、それはほんとうの愛ではない。夫が貧乏なとき、夫が他の女の愛をうる見

667

込みと資格がないとき、夫が道徳、法律などにしばられているとき、こんなとき多くの夫はその妻を愛する。もしかりに彼等を、彼等を妨げているすべての事から解放したら、彼等の多くはいうまでもなく、若くて美しい女へ駆け去るだろう。

アメリカの新聞イブニングポストの人事相談欄に、こういうことが出ていました。

「主人は女中も雇ってくれず、自分は子供の教育から拭き掃除まで一切やらなければならず、お化粧する時間もなく、過度の疲労のために神経質となり、自然主人につらく当たるようなことがある。こうした日を送っていたら、やがて主人に嫌われるような時が来はしないかと心配している」

との問いに答えて、

「仕事を十分にせずに、半分しておきなさい。あなたの今日のような生活を続けていたら、だんだんあなたは醜くなって、やがて主人との隔りが大きくなり、子供を継母の手にわたすようなことになるかも知れない。洗濯ものがたまって仕方がないし、料理などもあるべく手を省いて、時間の余裕を見出して、お化粧をするようになさい」

実際、料理などは下手でも、美人の妻ならば、夫は手ばなすことができないでありましよう。これに反して、いくら料理が上手だろうと、いざとなつて、少しも惜しくは思わないでありましよう。

ある土地の名望家で、主人は朝から晩まで家をあけている。帰ってくると、遊廓の女の

話などをして友人たちに自慢したりしている。それは妻に対する何という冒瀆だったろう。けれども、妻はおとなしい女だったから、ひたすら夫の愛を得ようと思つて見だしなみをするようにした。

けれども彼の浮気はやまない。いまや遂に時がきた。彼女は家を出て遊廓に身売りした。果然、今まで身だしなみという程度であつたのを、こんどは奔放な装いをこらしたのと、虚無的な感情の影響とで、遊廓第一の美妓とうたわれるようになった。

主人は、一旦は塵でもするやうな気で、彼女の乞うままに離別し、これ幸いと別の女を入れたが、彼女がいま全盛の美妓となつたのを見ては、あたら掌中の珠玉をなくしたやうに思われ、これまで感じたことのない悩みを感じた。

主人は彼女にわび、再び帰ってくれと乞うた。けれど彼女はきかなかつた。

「花はただ、咲いている」

主人は絶望して、まもなく死んでしまった。家の中にいてくすぶっている時、彼女は汚らしい。けれども一度、他の女と同じ場所に置かれたら、そう見捨てたものでない。

すなわち、かくて近代の婦人たちは、こうして自覚を意識的に、また無意識的にしはじめたのであります。最早や彼女たちの唯一のものは、美、これです。そのため、家族制度なんのその、母性などという愚かな問題に耳をかす何等の理由すらない。いうまでもなく、愛などという陰気なものを何で彼女が望もう。彼女は行く。限りなく行く。

彼女は、初めて人が女をどう作つたか、そしてその作られた型の中で、ただ美、これのみが最高のものであることを知つた。女の一生の運と、そして女を一切の屈辱と不自由の中から浮び上がらせるものが、すなわちこれであることを知つた。

美はわがままである。そしてそれが許される。限りなく許される。落語家でさえないではないか。美人は一切である。泣けば泣いたでよい。怒れば怒つたでなお可愛い。醜婦とくちは何もかもわるい。彼女の眩きは卑屈であり、その叫びはやかましい。

七

美へ！ 美へ！

かくて今や婦人たちは、それをめがけて何ものをも、火をも、水をも、そのすべてをもいとわず馳せ向かう。見よ、古今東西の芸術は、挙げて美人をその君主と崇めている。美人がなくてそれらの一切の詩が、どうしてあり得よう。

ダンテは恋人ビアトリスを「すべての悪の破壊者にして、すべての徳の女王」と呼び、彼女がこちらへくるのを見て

会釈してもらえと思つたとき

世界にわが敵はなかつた

といつた。詩聖ダンテをして、かくも熱叫せしめたものは何でありましょう。美、これ

でなかったでしょう。ビアトリスという婦人が、徳の女王であったかどうか分からないが、ともあれ彼女が美人であったことは想像にかたくない。

美は一切である、美こそはすべてだ。そのことごとくだ。どれもこれもが即ち美だ。

ストリンドベルクは、感情にも理知にも低級な女性が、動物的本能（おお、けれどそれだけではない）によって、男性を征服し、男性の肉体を荒掠し、靈魂に寄生して吸血鬼のようにその靈能を搾り取ると、書く。

けれど、男はくだらぬ一個の女に対してなにゆえに、こうまで不甲斐なく、意気地がないか？ なにゆえ征服され、搾りとられるほどにも卑屈であるか？ おお女性の美、然り、美の前において、なぜかくまでも愚かであって弱いのか？ このことを考えず、ひたすら女性を憎悪する彼自身、彼が最も侮蔑した「女性と同じ地平線に墮落している男性」の一人でなかったら辛いであらう。

「婦人の美は、その婦人の精神の美の表示だ。我々が美人を恋するのは、その美貌そのものに恋するのでなく、美貌を通じて感得される精神の美に対してだ」

というクリスチャン的青年たち、そしてストリンドベルクもその一人だった。三十代のストリンドベルクは女性憎悪者でなく、讚美者でありました。

ストリンドベルクは、生涯に三たび妻を替えました。最初の妻シリ・フォン・エッセンと、三度目のハリエット・ボッセとは共に女優で、二度目のフリーダ・ウールは女流詩人

でありました。これらの妻たちは、いうまでもなく美人達でした。それは肉体を通じた魂の美人たちであるはずでしたが、ストリンドベルクをして、

「何も与えることなしに、何でも自分のものにしようとする。自由を不法に変え、無責任に変える。習慣を放棄すると共に、道徳を失ってしまう。名譽の考えを保つことができなくなつて、自制の要求を了解する頭も感じもなくなる。男と仲間になるとしても、女にはまるで仲間の意味はわかつてはいない。女が小利口なら、男の力を絞りとって、思想を盗んで、結局男を精神的な廃物にしてしまうのだ」

と嘆かせたのは意外でした。この後、彼は女性憎悪者の最も極端な一人となりました。彼はつまり、美の秘密、美の使命、美の職能、そうしたものについてなんにも知らなかったのだ。

美とは何か。それこそは魂と相反するもの、それこそは金と時とたえざる奉仕とによって支持されるもの。美は反自然。美はわがまま。美は贅沢と放恣と無秩序の中に生まれ、そして育つ。

田舎にはまれな美人ということがある。そのように田舎には美人が少なく、都会とか上流社会、こうした有閑的な贅沢な、それゆえに不正な場所に美は生まれて育つ。

このことは個人にもあてはまる。家事を放棄し、愛を放棄し、ただ美、これにのみ専念する女性、彼女は美しい。これに反して貧乏で、子供が多く、年中仕事に追われている婦

人、彼女はみにくい。美が女に勝つか、女が美に勝つかの戦争があったのち、大概の妻は美から棄てられてしまう。そして夫からも。

しかし、ストリンドベルクが選んだ三人の女性は、美を生命とする者たちであった。彼女たちは美に仕える者としての、完全な資格をもっていた。何も与えることなしに、何でも自分のものにしようとする。これ実に美が女たちへ書いて与えているテーゼの一であり、自由を不法に変え、習慣を放棄し、道徳を踏みこむ、これその二である。

見よ、今アメリカ女性、そしてそれへ合流する全世界の女性、美に奉仕することのみを、ただ一つの、そしてその全部であるとする女性たちがまさしく自由を不法に変え、習慣を放棄し、道徳を踏みこむにじりつつあるのを。

こうした内在的秘密の所有者美、それへの奉仕者としての三人の妻たちに、犠牲的精神、自制的精神を要求した彼ストリンドベルクこそ滑稽であった。しかし、それも無理はない。鑑賞者としての男たちにそうした秘密のわかるわけではない。ただ女のみが、意識的にはどうか知らぬが、本能的に知っていた。

「美というものは、天の与えたものだ。醜く生まれたものは、あきらめたがよい」といわれようと、彼女たちはあきらめない。彼女たちは、美というものはそういうものでないということを知っている。彼女たちは着物、そしてあらゆるわがままと贅沢を獲得すること、即ち美を獲得することだと考えている。そしてそれはその通りだ。

天成の美人というものがある。それは形の整っている者をいうが、そういう者はいかにして出来たか？ それはいうまでもないこと、人為的、人工的粉飾の固定化だ。この意味において、美人は貴族、売笑婦の孫に多い。これに反して醜婦は無産階級に多い。

ウォード(?)は、野菊から庭菊を造る植木屋の苦心を述べている。植木屋はしばらくの間も努力を怠ってはならない。もし彼がそれを怠ったならば、次の年から花は次第に退化して元の野菊に帰るであらう。

そのように、どんな天成の美人も、もし白粉をつけマッサージを試みることを怠ったなら、直ちに退化の兆が認められるようになるであらう。美の奉仕者であるすべての者たちは、全く植木屋そのものであって、寸時の間も怠ることがない。

おお、何とたいへんな、何と可笑しみをおびたこの努力！ 神経衰弱がうずく。とはいふものの、社会的動物である一人として、社会的傾向に打ち勝つことは、それに負けるのと同義語であるのを何としよう。

足を一步、町の中に踏み出すと、町がいう。「白粉をこて塗りにしろ！ 絹の着物を着て、ダイヤの指輪をはめろ！」

でないと醜く見える。惨めに。不調和に。しかし、いまは自然のなりゆきにまかせねばならない。貧乏が組織の罪であることがわかったように、美の秘密もわかった。いま、すべての婦人は美にと急ぐ。虚栄であるといわれようと、それが何だろう。それはしくじっ

た時のこと。賢くて、技目がなくて、与えることなしに奪うことの上手な婦人こそ精神的な美人よ。

実に近代婦人は、こうしたあえぎを心に感じながら、時代の意志となって横行している。

八

しかし、古い美の内面には新しい美が芽生える。この新しい美は、自らの育つべき土地を探している。新しい美、それは何であろうか。それは最早や「美」でない何かではなからうか。従来の意味における「美」、こうした一つの凝固した悪趣味的なものが分散し、そこにはあらゆるものの普遍的時代がくるのではなからうか。たとえていってみる。

植木屋さんは、庭があるために庭に調和した人工的な庭菊を作り出す。しかし、その庭菊が元の野菊に比べて絶対的に美であるというとはいわれない。庭菊を野に帰し、野菊と並べてみる。野菊の社会的なのに比し、何と庭菊の個我的であることか。

これと同じように、今日の社会における美は強権的、都市中心的、即ち区画的、箱庭的制度の中のものであって、分散的、自然的な制度の中に生きる美ではあり得ない。

今日でも、都市の中から田園へ帰った婦人は、都市的な粉飾をいつ知れず廃止してしまう。そしてお化粧を廃めて、すべてを自然の手にまかせた時、その顔はもっぱらその婦人の思想の反映である場合が多い。このとき美の対象は、美の根本的問題は、直接的にその

思想にあるといつてよい。崇高な思想、輝やかな思想、深刻な思想、かくて新しい美の根底はそこにおかれるであろう。それこそ強権的でも、玩弄的でもない、自治自主的な進歩せる、そして広闊で高級な社会人のもつ美であろう。

またそこには、今日のような意味における男性美（強権的な）あるいは女性的（玩弄的な）というものがなく、生理に即した自然な何ものかがあるのみであろう。そしてその時、「女性には心霊というものがない。それは女性の生理的条件に基づく」とショウベンハウエルをしていわしめたことが、逆に「女性はその生理的条件の故に心霊的である」ということになりはしまいかと、わたくしは想像する。

ともあれ、今日において、絶対であるかのように考えられがちな美醜の問題は、少しもそうでなく、今日における醜男醜女諸君が、何ら醜男醜女でないことは明らかな事実だ。何となれば、今日において背負わされているその不名誉な名前は強権者、支配者どもによって製造されたもので、そのままそっくり返上に及ぶことが、新興階級のなすべき一つの義務であるからです。